翔べ！世界へ

人間を学ぶ―遥かなる時間と空間を視野に

両目を手で横に引き伸ばすいわゆるアジア系の顔を作られたこともある。バナナ（「白人べったりの黄色人種」を表す）などの侮蔑語や悪質な人種差別のジョークも耳にした。ナイロビの街を初めて一人で歩いたときには、自分が異質な存在であると感じ、どうしようもない恐怖感に襲われた。人類学を専門とする私には、これらも非常に貴重な経験である。一般に、肌の色で認識される人種だが、人間のこのような分類は生物学的に意味がない。では、なぜ人種概念と差別が存続しているのか、これこそ人類学で扱うべき問題だ。人種問題を社会的構築とみなす学者も多いが、私は、差別意識そのものは、動物との連続性を持つ人間の感情に深く関わるものであろうと考えている。

◀学位授与式後、シャンパンパーティ会場となったピーボディ博物館そばの広場で、お気に入りのサイの像と

日本を批判すること vs 変えること

離れていると、日本を平気で批判できてしまうのも事実だ。日本の政治や、日本人の「井の中の蛙」的言動を恥ずかしく思うことはしばしばだった。学問においても同様で、私の場合、留学して得られたものが大きかったため、どうしてもっと早く出なかったのかと悔やんだものだ。だが、日本に戻れば、無責任に批判をしている場合ではない。今度は、望ましいと信じる方向へ、自分で現状を変えなければならない立場にあるのだから。もちろん、相当な試練だ。しかし、あらゆる変革にとって、個々人の小さな努力の積み重ねが必要なことは確かだろう。私は、自分が幸運にも出会えた「人間という生き物を知る喜び」を学生に伝え、自己の狭い世界にとらわれがちな彼らの扉を、少しでも開けられればと思う。ケニアで学んだハクナ・マタタ（スワヒリ語でno problemの意）の精神も忘れないようにしたい。

経団連が事務局を務めている各種奨学金運営団体の活動により、毎年高校生から大学院生までの多様な奨学生が留学し、今日、その経験を活かして内外のさまざまな分野で活躍している。本コーナーは、留学先での経験と現在の活動の模様を紹介することにより、これら奨学生を送り出してきた奨学金運営団体への一層の理解促進と、これを支え、協力してくれた企業への活動報告とするものである。

国際文化教育交流財団は、経団連第二代会長　故石坂泰三氏の遺徳を記念し、一九七六年に設立された。これまでに、世界二八カ国の大学・大学院へ一四五名の日本人留学生を派遣するとともに、世界三五カ国四〇三名の外国人留学生への奨学金の供与や文化教育面での事業運営を実施してきている。

お問い合わせ・連絡先
経団連社会本部

奨学生体験者からの寄稿㉞

内田亮子

うちだ　あきこ

千葉大学文学部行動科学科助教授

国際文化教育交流財団第10回生（1985年度）
85～92年ハーバード大学大学院留学、92年11月Ph. D.（博士課程修了、人類学）、同大学ピーボディ博物館研究員、京都大学霊長類研究所助手を経て、97年３月より現職。専門は人類進化。

ハーバード大学では、奨学期間の二年を含め計九年間を過ごした。ケンブリッジという学生街でこんなに長居できたのも、ボストン近隣の文化や自然、そして、〝至福〟とも言える独特の知的環境があったおかげだろう。私にとって、実にさまざまな世界への扉がここから開かれた。

進化との出会い

私が生物人類学を専攻する機会を得たハーバード大学には、進化研究の世界的権威が勢揃いしていた。私はまず、日本で学んだと思い込んでいた生物学や人類学の基盤が、根本からずれていることに愕然とさせられる。それまで詰め込んできた知識を統括する概念的枠組みに、ようやく出会えたからだ。当時、私の知的刺激への欲求は、おおげさに聞こえるかも知れないが、乾ききった砂が、ゴックンゴックンと雨を吸収するようだった。指導を受ける環境に恵まれた私は、人類の進化についての研究を本格的に始めた。

進化といえば、恐竜や始祖鳥を思い浮かべるのが一般的かもしれない。だが、本来、進化理論は、人間の行動や心の働きを含め、生物のありようを理解しようとするすべての研究の問題設定に必須である。近年、自然淘汰、適応、ゲーム理論など、進化生物学の主要概念が、さまざまな分野で注目を集めており、国際政治や経済も例外ではない。例えば、元マイクロソフト社のR. Brodie、ハーバード大学ケネディスクール出身のT. Burnhamと進化生物学者のJ. Phelan、社会心理学者の山岸俊男の著作など、適応の観点から経済活動に関わる人間行動を分析し、高い評価を得ているものは多数ある。残念ながら日本では、進化についていまだに大きく誤解されており、適切な教育や情報提供が十分ではない。

二〇〇〇万年前のアフリカへ

一九八八年以降、私は、博士論文プロジェクトの一環として、ボストンから大西洋を越える調査旅行へとたびたび出かけた。アフリカの発掘地やヨーロッパ各地の自然史博物館を訪れ、二五〇〇万～二〇〇万年前の霊長類や人類の化石、ゴリラやチンパンジーなどの骨格資料からデータを収集するためだ。重要な調査経験であったと同時に、壮大に生命の生きざまが展開されるサバンナ、イギリス植民地支配から独立後、揺れ続けるケニア、それぞれ異なる顔を持つ西欧の都市など、さまざまな自然、文化や歴史に触れ、多くの人々と出会えたのも幸運に思う。遥かに長い時間の流れから偶然生まれた人間という小さな存在と、その営みの多様性について実感するのに、これほど効果的で贅沢な旅はないだろう。

人種差別とは？

有益な体験は、もちろん楽しいことばかりではない。ボストン郊外で老齢の男性に、Japと言われ唾を吐きかけられたこともあるし、友人の子供に、初対面でいきなり